

# 春日権現験記絵巻—夢の表現の特性—

A study of Kasuga Gongen kenki Emaki  
—The Properties of the picturization of The “Dream”—

池田洋子

Ikeda Yoko

はじめに

1. 春日明神の靈験のありよう
2. 夢場面の情景と現実場面の光景との関係性の分類
3. 夢の場面のある段の絵画表現
4. 夢場面情景の人物表現の特性
5. 夢場面の情景と現実光景の表現

まとめ

## はじめに

1309年(延慶2年)に春日大社に奉納された春日権現験記絵巻は、付属の目録一卷に、全二十巻の内容と詞書の筆者名(鷹司基忠・冬平・冬基・一乗院良信僧正)と絵の筆者名(当時の絵所預右近大夫将監高階隆兼)と制作願主名(西園寺公衡)が記されており、制作の詳しいことが知られる作品である。

この絵巻の主要なテーマは、春日大明神の神威と加護の靈験譚である。それらは氏子の藤原氏一族や一体関係を持つ藤原氏の氏寺興福寺に係わる人々に関するものである。それらの内容は春日大社や興福寺にあった内部資料を参考に当時広く知られた有名な説話を選んで、詞書を組み立てていったと考えられている<sup>註1</sup>。

## 1. 春日明神の靈験のありよう

さて、ここに春日権現験記絵巻の詞書に見られる春日明神の靈験のありようを絵巻の構成の順に簡単にしるす<sup>註2</sup>。(第1巻第1段を「1-1」と略記する)

- 1-1: 橘氏女に憑依し御託宣—御宝前にて声を放つ
- 1-2: 光弘の夢—竹林で貴女と対面
- 1-3: 吉兼の夢—貴女が飛来し竹の繁茂が子孫繁栄につながると告げる
- 1-4: 白河院に憑依—院の御気色が変わり、明神に春日への参詣のないことを咎められる
- 2-1: 伊房(行成の孫)の夢—「御経蔵」の額字を書くように告げられる[絵なし]
- 2-2: 白河上皇子供の頃の明神影向託宣—天井から伊勢明神の勧めで加護すると告げる声がある
- 2-3: 二条関白の姿に現出—明神、二条関白と同じ姿で宝剣を守る

- 3-1: 左大臣源俊房に憑依—関白忠実に子どもについて語る
- 3-2: 明神示現—春日明神、中臣則助に示現して、その歌を中臣則助が書き取る
- 4-1: 知足院関白忠実の夢—密教を聴聞時、天狗形僧が現れるが春日神主時盛を見て退散する
- 4-2: 稚児の現出—知足院関白忠実が出家の暇乞いに春日社参詣時、春日第3神が告げる
- 4-3: 神人の現出—明神、摂政基通が西海に行くことを制する  
摂政基通の夢—垂迹曼荼羅を拝す[絵なし]
- 4-4: 巫女に憑依—若宮拜殿にて重病の三条内大臣の命を召すと語る
- 4-5: 巫女に憑依—若宮前で後徳大寺実定に「記し顕す」と託宣
- 4-6: 後徳大寺実定の夢—興福寺僧が訪れる。その後内大臣に還任する
- 5-3: 春日宝殿前雨夜の明神影向託宣—俊盛に「菩提の道も我心の道」と告げる声がある
- 5-4: 或人の夢—3歳位の稚児が伴った三位入道(俊盛)の往生場面を夢に見る
- 5-5: 季能の夢—異形僧(天狗)の訪問を春日の使いが退散させる
- 6-1: 貴人現出—狛行光重病で絶息したが、春日神が閻魔庁より蘇生させて地獄巡りさせる
- 6-2: 或人の夢—親宗邸の門前に神人3人が走り、親宗を召す使いという  
親宗の向かい家の人の夢—神人が親宗邸に乱入する。
- 6-3: 護法占いに憑依—『心経』呑む蛇を虐めた子供の病が『大般若』転読で平癒すると告げる
- 7-1: 後鳥羽上皇の夢—経通を蔵人頭に還任させないことを咎められる[絵なし]
- 7-2: 開蓮房尼の夢—「南無大明神」真言の功德の説かれる
- 7-3: 興福寺範頭の夢—春日社参詣の時、幣殿で束帯の男が若宮に「狛近真に陵王舞わせるよう」告げさせる
- 7-5: 五条局の夢—大河畔の卒都婆に大明神と弥勒菩薩の極楽往生への救済を書いたものを見る
- 8-1: 京の或る尼公の夢—大明神が嵯峨の釈迦堂への参詣

- を勧める
- 8-2: 範雅僧都養父大舎人入道の郎党の夢—入道の家に唯識論があるので疫病(武士の姿)の進入を免れた
- 8-3: 神人現出—明神、顕密いづれをも「貴き・深き」と宣う
- 8-5: 怪しい聖現出—壱和僧都に興福寺に帰るよう託宣  
巫女に憑依託宣—帝釈宮に講師の担当順に名前がありそこに汝の名もあると教える
- 8-6: 東大寺法蔵僧都の夢—春日明神が唯識義の章を隠したことを告げる
- 8-7: 興福寺旧住僧の夢—春日宝前を観念時、貴人姿の春日明神を拝し「汝を捨てず」と託宣される
- 9-3: 閻魔庁に童子現出—興福寺僧の息絶えた母を明神が蘇生させる
- 10-2: 山階寺林懷僧都の夢—参籠中社前にまどろみ、束帯姿の大明神に音曲を止めたことを意見される
- 10-3: 勅使左中弁資仲朝臣の夢—維摩会の初座夜、長者頼通が永超得業の居る西室に三拝する
- 10-4: 隣室に神人の現出—永超得業の元を訪れた異形の僧から明神が守る
- 10-5: 大明神後ろ姿で現出—永超の前に後姿で現れる「出離の道を求めるよう」告げる
- 10-6: 老翁現出—天台座主教円『唯識論』転読すると(万歳楽)を舞う
- 10-7: 南都教懐上人の夢—3年昼夜極楽願う折、腰痛を春日社に念じたところ貴女が現れ西に飛び去り癒える  
或る人の夢—維範阿闍梨入滅時に、教懐が来迎聖衆の先頭に立ち舞う
- 11-1: 恵暁法印の夢I—恵暁法印息絶え閻魔庁で『法華経』を読んで再び蘇生する  
恵暁法印の夢II—若い頃、大明神が「権別当にするために召した」と告げ離寺を制される。
- 11-2: 有験僧に憑依託宣—恵暁法印播磨書写山で春日明神から5年後に帰れると告げられる
- 11-3: 或る人の夢—春日大明神が本殿を去る
- 11-4: 菩提院住僧印慶の夢—春日三宮が地藏菩薩の形で帰還、一の鳥居に居る
- 12-1: 興福寺別当蔵俊僧正の母の夢—春日明神が光り輝いて口に入り、その後蔵俊を孕む  
興福寺別当蔵俊僧正の夢—開かず門から春日四殿の明神が輿で入り「四殿とも参拝するように」と告げる
- 12-2: 鹿現出—長講会の因明大疏の戸前に鹿が法を聴く。
- 12-3: 東大寺東南院恵珍の夢—毎日春日社に詣で、ある日一の鳥居の西畔に車に乗る地藏菩薩と会う
- 12-5: 興福寺恩覚の夢—石清水八幡の宝前に春日明神が菩薩と会見し「上生の来迎を得させるため」と語る
- 13-2: 勸修寺晴雅律師の家の少女の憑依—春日—鳥居に生れ守護するが他門に行くこと本意ではないと告げる
- 13-3: 若宮前で明神影向託宣—童に歌を歌わせ、勸修寺雅宝僧都のもとに預けよと託宣
- 13-4: 盛恩得業の夢—春日四宮の小児が肩に手を触れ、勝詮僧都守護のついでに汝を見に来たという
- 13-6: 護法に憑依託宣—春日四宮が降臨して他所に黙って移ったことを僧増慶に咎めた
- 14-1: 或る寺の僧の夢—小皮籠が燃え、消そうとした人を切りつける手が現れた。後には唯識論のみ残る。
- 14-2: 春日社参籠人の夢—第四社に貴女が現れ、襲衣裏の大般若経見せる。隆覚僧正が大般若経を転読する
- 14-3: 隆覚の堂衆の夢—春日社の百日参りするが、大明神が「隆覚が紙1枚も施さない」と告げる
- 14-4: 隆覚僧正が夜中に参社した時の夢—明神示現し、「長講に入るように」と告げる。
- 14-5: 頓覚房百日参春日社満願時の夢—膝の上で若君が「法華経転読と同じく唯識論も読むように」と告げる
- 14-6: 京の大火を免れた家の隣人の夢—黄衣神人が長押にある『唯識論』を探り、火を消す
- 15-2: 巫女に憑依—唯識論を読み疲れた小生を蹴飛ばしたので一切助けないと告げる
- 15-3: 斎宮の夢—束帯姿の貴人が「春日八講の季頭に助成するよう」告げ、浄恵に遣した襲御衣が教英に届く
- 15-4: 実尊僧正の夢—鹿が一頭縁の外に立って自分を見つめる。その後喘息が治る  
菩提山尊遍得業の夢—垂布掛けた奥に大鹿一頭が立っていた
- 15-5: 紀伊寺主の夢—老僧(明神)が「蓄えた米を惜しんだが、使うべきだ」と咎めた
- 15-6: 護法占いの物憑きに憑依—清増法橋重病の折、「我を頼みとするから哀れに思し召す」と託宣
- 16-1: 明神影向—笠置貞慶病悩の序の託宣を不信して咎められるが「再び人天に生ずる」と託宣
- 16-2: 笠置貞慶の夢—春日御供預親弘がきて大明神の所在を尋ねる  
笠置真恵房の夢—新造社の裏山に大鹿(体長一丈、体高七尺、角長五尺)二頭がいる  
明神影向—笠置貞慶、天に声がして和歌と今様をうた

うのを聞く。

- 16-3: 明神影向一笠置貞慶重病のおり、釈迦に始まり法相宗・貞慶までについて語る
- 16-4: 璋円僧都或る女に憑依一大明神の春日野下の地獄では地蔵菩薩の灑水器から漏れる水滴が罪人を救う
- 17-1: 橘氏女に憑依一明神、明恵の渡海を制する
- 17-2: 橘氏女に憑依一明神、明恵と対話
- 17-3: 橘氏女に憑依一女芳香を放つ、明神様々なことを明恵に物語る
- 18-1: 春日社参社時宝前での明恵の夢一霊鷲山で釈迦に五-六度奉仕する  
紀州下向時の明恵の夢一毎夜、明神の眷属に付き添われる
- 18-2: 橘氏女に憑依一東大寺前の鹿、涅槃絵に聴聞したこと告げる
- 18-3: 春日社頭での明恵の夢一霊鷲山に詣で釈迦に奉仕する  
春日社御前で明恵の夢一手に二個の鉄鎚を持った
- 18-4: 明神影向一笠置貞慶、不思議な芳香がして明神影向と知り法施する
- 18-5: 明神影向一明恵祈請し、明神影向し左脇に立つと知る。
- 19-2: 常葉に瑞光一神鏡のありどころを知らせる
- 19-3: 春日神人康景の夢一朝高尾山のはるかな嶺に瑞光が見え
- 19-4: 高尾山の鳴動
- 19-5: 布施山に神鏡が光る
- 20-1: 春日山の木が枯れる一大明神、地頭が置かれることになり出御し、地頭がなくなり帰還

上記の詞書中の霊験譚には、春日明神自身が加護したり神威を与える人の前に、何者かに姿を変えて直接現れる場合の「現出」、何者かに取り憑いて語らせる場の「憑依」、夢に見せて意思を告げる場合の「夢想」、姿は見せないが存在を感じさせたり直接言葉を届ける場合の「影向」、そのほか山鳴りの「鳴動」や光を発する「瑞光」など直接その意志を届けなくて現象のみを見せて其の力を示す場合などがあることがわかる。

そこで、それぞれの神の示現の方法(春日明神が人々に自分の意思を伝えるためにこの世に現れる方法)別に、段を分類してみる。

- A現出一春日明神が他の人物になって現れる  
2-3 4-2 4-3 6-1 8-3 8-6 9-3 10-4 10-5 10-6 12-2

B憑依託宣(人に憑いてその口から話させる)

- 1-1 1-4 3-1 4-4 4-5 6-3 8-5 11-2 13-2 13-6 15-2 15-6 16-4 17-1 17-2 17-3 18-2  
C夢想

- 1-2 1-3 2-1 4-1 4-3 4-6 5-4 5-5 6-2 7-1 7-2 7-3 7-5 8-1 8-2 8-6 8-7 10-2 10-3 10-7 11-1 11-3 11-4 12-1 12-3 12-5 13-4 14-1 14-2 14-3 14-4 14-5 14-6 15-3 15-4 15-5 16-2 18-1 18-3 19-3

D影向託宣(姿かたちは見せないで、芳香・音声・気配などを発する)

- 2-2 3-2 5-3 13-3 16-1 16-3 18-4 18-5

E明神が現象のみで伝える(直接託宣などしない)

- 19-2 19-4 19-5 20-1

このように示現の仕方ごとに段を並べてみると、「夢想」に現れるという示現の仕方が一番多いことがわかる

さて、絵画中での明神の表し方が、それぞれの示現ごとにどのような人物のかたちとして表われているかをみる。<sup>註3</sup>

A現出(春日明神が他の人物になって現れる)場合は、束帯姿の高貴な人物が多く、つぎに袿姿貴女・童子形(みずら闕腋胞姿・おかっぱ頭など)そして僧形がある。

また、B憑依の場合は、其の場面で適切な人物に取り付いて其の人物に言葉を言わせる。その憑依者は直衣姿貴族、稚児・家中の少女・女人、巫女・物憑き・護法占い、小袿姿橘氏女などさまざまである。

上述のABの場面は、現実光景の中に起きているものである。

C夢想の場合は、束帯姿・直衣姿貴人、袿姿貴女、童子の他に、神人地蔵菩薩がある。

現実でなくて、あくまでも人の意識の中での出来事である。

ところでこの現実ではない夢の場面は、絵巻の中で現実光景と隣り合わせに描かれることがある。夢を見ている主体が同時に描かれている場合である。本稿では、そのとき両者の表現を手がかりに、両者の識別をどのように絵画作者が考えていたかを探っていきたい。

まず、夢の場面を全20巻の中から取り出し、次に各場面がどのような形で描かれているかを区分し、描かれた夢の場面内容の情景について、其の特性を、人物表現と環境表現とに分けて検討する。以下のように本稿をすすめていく。

2. 夢場面の情景と現実場面の光景との関係性の分類
  3. 夢場面のある段の絵画表現
  4. 夢場面情景の人物表現の特性
  5. 夢場面の情景と現実光景の表現
- まとめ

## 2. 夢場面の情景と現実場面の光景との関係性の分類

上記に示したように、詞書中の靈驗譚のうち、春日明神が加護するか神威を与える人に夢の中で示現する場面は40箇所ある。それらの夢の場面を描く画面を現実と夢のいずれに属するかで分けて考えてみる。<sup>註4</sup>

まずは、現実の光景と夢の情景のいずれかを描く段をあげる。

(1) 夢想中の情景の内容を表すモチーフを主に描く段:

5-4、10-7Ⅱ、14-2

(2) 現実光景の中で夢想している人物の様子を表現するモチーフを主に描く段:

7-2、14-4、18-3

次に、現実光景の中で夢想している人物の様子と夢の中の情景内容の両方を描くモチーフがある段をあげる。

(3) 夢を見ている人が眠っている光景と、夢の中の情景内容を連続させる段:

4-1、7-5、11-1Ⅰ(複数の夢)、14-1

(4) 主に夢の情景の内部に夢を見ている人物モチーフを入れる画面を人物の様子で2つに分ける。

一①主に夢の情景の内部に、うつらうつらする(眠っている)様子で夢を見ている人物モチーフを入れる段:

5-5、8-7、10-7Ⅰ、11-1Ⅱ(複数の夢)、13-4、14-5、15-4Ⅰ(複数の夢)

一②夢の情景の内部に、夢を見ている人物モチーフを平常の態度の様子で入れる段:

1-2、4-6、7-3、10-2、12-1、12-3、15-4Ⅱ(複数の夢)

(5) 現実の光景と夢の情景とを連続させる画面も2つに分ける

一①現実の光景と夢の情景の内容を連続して描く段:

6-2、8-2、10-3、11-4、19-3

一②現実の光景と夢想する人が眠っている(うつらうつらする)光景と夢の情景の内容が連続する段:

1-3、12-5、15-3、15-5、16-2ⅠⅡ(複数の夢)

分類してみた結果、連続する複数の夢が一面に描かれているものや、現実と夢がそれぞれ別に描かれるのではなく同じ画面に続いて描かれるものや、さらには16-2や19-3のように複雑に構成された画面の一部に夢の場面が嵌め込まれたものもある。

ここから、夢は現実と単純に対峙するものではなく、現実と微妙に絡み合っている様子に表現されていることがわかる。

## 3. 夢の場面のある段の絵画表現

それでは、この夢の情景が如何に表現されているかを、前章の分類に従って、環境表現も加えながら検討する。ただし、前章に上げた分類項目の(2)は夢の情景がないので除くことにする。

(1)5-4、10-7Ⅱ、14-2

5-4: 俊盛の往生の夢(見た人が語る情景)一画面下半分に檜皮屋根2つと板葺屋根、爛漫の桜、松、芽吹く樹木が霞の中に描かれる。上半分は無地のままにして、空を表している。その空に下方の家からのびる白い瑞雲の先端部分があり、そこに蓮華座にのる童子と其のうしろの神人を乗せる。

10-7Ⅱ:(ある人の見た)惟範阿闍梨の往生一前の夢の教懐の庵ある山中に続いて、高野山中の惟範阿闍梨の庵がある。その左側にある山あいから来迎の聖衆を乗せた瑞雲が降りてくる。懸崖造りで板屋根の庵は葎を開け放ち、中に惟範が合掌している。画面上部にあたる庵の屋根の大半は霞で隠されている。奥にもう一軒庵があるらしく、こちらは格子が黒く塗られている。崖の下には、天秤棒で水桶を担ぐ僧がいる。

14-2: 第四宮の貴女姿の夢一狭い画面に、斎垣のすぐ外に回廊の屋根が迫っていて、春日社本殿が続く。一番手前の第四御殿が上から見下ろして捉えられている。階の上の正面の板扉が外され、御簾がみえる。その御簾の裾が外に押しやられ、そこから女性の美しい襲装束の端がはみ出している。画面上部にある屋根には霞が掛かっている。建築物でぎっしり詰まった構成で、少しの空白もゆとりもない画面空間が形成されている。

(3)4-1、5-5、7-5、11-1Ⅰ、13-4、14-1、15-5

4-1: 天狗僧退散一画面上半部に格子と葎の部分がすべて取り外された寝殿造りの建物が描かれ、下半部は庭になっている。建物の右半分は妻戸を閉じた中に、女房が横たわる畳を敷いた庇の間と、主人が横になって寝ている奥の身舎の間の襖が開かれている。閉じた妻戸の左側の庇の間には、上畳み上に僧がすわり、半分御簾を上げた奥の間に縹色の直衣に指貫袴の人物が庭に向かい座っている。彼らの外にある縁には位冠束帯姿の人物が座る。建物は屋根や天井も取り払われて描かれるが、特に夢の情景側は、御簾以外のすべてが開け放たれた状態である。画面左奥に続く妻戸も開けられ、天狗僧の逃げ道になっている。上部は霞に覆われている。

- 5-5: 天狗僧退散一樓の先端の妻戸が閉じた檜皮葺屋根の建物が、左に曲がったところから格子葺がすべて取り外されている。その庇の間に女房が二人眠る。半分開いた襖の奥の間に主人が眠っている。異形の僧が左側にある開け放たれた妻戸に向かって駆ける。外には黄衣の神人が建物に向かって佇む。傍らに桃色の花の咲く大きな木が一本ある。屋根の半分より上部は霞が覆う。
- 7-5: 五条局卒都婆の夢一画面右側中ほどに、女房が眠る様子を妻戸を開けて覗わせる。妻戸の外には縁があり塀に囲まれる。妻戸の前だけ塀が途切れて沓脱板が置かれる。室内には、畳が敷き詰められその上に褥を敷いて女房が横になっている。頭の上方には屏風が置かれる。この屋根の上部は霞が大きく覆っている。局のある建物の外に続く地面が緑色に塗られ、水が打ち寄せる岸にある黒々とした文字が書かれた高い卒都婆を壺装束の女が見上げる。大きな河らしく、中に大きな岩があり、白波を立てて水が岸に打ち寄せている。建物上部から伸びる霞が上空を覆っている。
- 11-1I: 恵暁、閻魔王宮を訪れる夢一画面右端から中央部に正面向き建物の奥の間に横たわって眠ったままの恵暁がいる。弟子僧達は格子を上げている。屋根の上部の霞に続く雲が途切れた中に、斜め格子の高床の上に8巻の経の載った机の前で経巻を読む恵暁と向かい合う閻魔王が座す。連子窓は緑に柱や戸口は朱塗りになった建物のバルコニーのところ二人は座り、庭には冥官・獄卒・罪人が描かれる。上部も左端も雲で囲まれている。
- 14-1: 皮籠の焼ける夢一屋根天井格子葺すべてがない正面向きの建物の板敷の床に2段棚がある。その上にとった黒い皮籠から炎が上がり、その上方から刃物を持った腕が現れている。両手を前に差し伸べて、僧が駆けつけている。左には襖が開いて寝ている僧がみえる。こちらの建物は、舞良戸もしっかり閉められていて、壁には墨染めの衣が掛けられている。画面上部は霞が覆う。
- (4)-① 8-7、10-7I、11-1II、13-4、14-5、15-3、15-4I
- 8-7: 興福寺旧住僧の夢一画面上部の霞の上部に山があり空には半月が掛かる。画面右端の左下がりに斜線の板葺き屋根の庵に、左にある庭を向いて膝を抱いた僧が座る。庭には交差した背の高い松の木がある。その松の陰に雲に乗った束帯姿の人物(明神)が立つ。所々破損している垣の外では、紅葉が色付き、落ち葉が根方や少し離れたところに飛び散っている。周辺には女郎花のような花が寂しそうにぽつりぽつりと咲いている。
- 10-7I: 教懐の夢一正面向き建物の取り払われた戸から中が覗える。脇息により掛かった教懐に、袿姿の貴女が向き合っている。板葺き屋根に舞良戸が詰められ、廻縁が周囲をぐるりと取り巻く庵の建物脇の竈に小鳥が群がっている。竈から流れる水は前庭の池に注ぐ。池の周囲には、小岩や赤い花の咲く小木やみどりの灌木がある。竈の左脇から急に山が立ち上がり、深い山々へと連なっている。その間を、袿姿の貴女が瑞雲に乗って帰って行く。次の夢の惟範阿闍梨の庵の手前の山には鹿が3頭いる。画面上部は厚い霞が覆っている。
- 11-1II: 恵暁の夢一霞に包まれた画面中央部の格子を開け放った僧坊の襖を開けた奥の部屋に、恵暁が横たわって眠る。その前に束帯人物が後ろ向きに立つ。
- 13-4: 盛恩の夢一小部屋の中に、机にうつ伏して眠る僧とその肩に手を触れている童子がいる。灯台に火が立ち上っている。室内は簡単なうす茶色をつけるだけであるが、部屋の外の入り口は朱塗りの妻戸と緑色の板壁でできている。画面上下を霞が覆っている。
- 14-5: 頓覚房の夢一画面右にある斎垣の内側に、垣にもたれてうとうとする僧とその膝に乗るおかつば頭の童がいる。画面右側から下部を檜皮葺屋根のついた回廊が取囲んでいる。左端には春日大社社殿の屋根が続く。その後ろに背の高い杉木が立っている。画面上下端を霞が覆う
- 15-4I: 実尊の夢一画面上部に正面向きに僧実尊の居室が描かれる。庭には薄や藤袴菊など秋草が咲いていて、松なども手いれされた様子に描かれる。床の間に箱や巻物がぎっしり置かれている。その前の花瓶に紅葉が挿してある。実尊は脇息に寄り掛かりうとうとする。稚児や近侍僧が心配そうに前にいる。縁の近くに立派な角の鹿がいて、実尊の方を見る。
- (4)-② 1-2、4-6、7-3、10-2、12-1、12-3、15-4II
- 1-2: 弘光の夢一河の大きく蛇行するところの竹林の前に座る袿姿の貴女に、烏帽子を被った男が向き合って端座する。画面下部の小丘に小松が生える。霞はない。
- 4-6: 実定の夢一門を大きく開いて、走り込む僧侶が一人。開いた妻戸に降ろされた御簾を押し開けて顔を覗かせる男がいる。画面上部と下部は霞がしっかり覆っている。
- 7-3: 範頭の夢一画面上部に正面向きに朱塗りの柱と緑の連子の回廊が続く、そのほぼ中央に春日社楼門がある。

そこに直衣姿の人物が、その外の瑞垣に東帯人物が顔を隠して立つ。画面下部の垣の外に僧範頭が後ろ向きに座る。上部に少し霞が掛かる。

10-2: 林懐の夢—高い視点から春日社宝殿を描く。右下斜めに下がるラインに宝殿が並び、その一つの階の上に東帯人物が立つ。その左に平行するラインの斎垣の内に僧林懐の頭が見える。垣の後方に回廊の屋根が迫る。画面下部は、杉や松の雑木が並び、そこに霞が掛かる。画面左端も霞で覆われて終わる。

12-1: 歳俊の夢—画面上部に正面向きの白壁の塀に続く朱塗りの四脚門の「開かずの門」が開いている。門に向けて東帯人物が歩み寄ろうとして従者に裾を持たせている。4つ御輿があり、右の2つは地面に置かれているが、左の2つは白衣の僧たちが担いで運んでいる。輿の周りには従者たちが大勢いる。画面右端中央部に僧歳俊が座る。上部に少しだけ霞が掛かる。

12-3: 恵珍の夢—鳥居が画面中央にある。鳥居の左方向に牛車が進み、窓を開けて地蔵菩薩が顔を見せる。後方を大勢の神人が続き、その周囲をさらに多数の鹿が取り巻く。画面右端に僧恵珍が座っている。画面上半分は緑の地面に松などの雑木林があり、その中に霞が掛かる。

15-4II: 尊遍の夢—右下斜め下がりの檜皮葺屋根の建物の妻戸が開いていて、縁に立つ僧尊遍がその掛け布を左手で開けると内に鹿が正面を向いている。

(5)-① 6-2、8-2、10-3、11-4、19-3

6-2: 親宗邸の様子と夢—門前に輿や牛車とその召使たち、邸内表庭に竿に付けた文を持って走る僧、中門楼辺りに家司たち、寝殿正面には加持僧と女房が会話し、身舎に病で横になる親宗、襖の奥に子供と女房、柱に繋がれた猿、厩の馬と馬飼いが描かれる。建物は左下斜め下がりに配置される。画面最下部に屋根付塀がある。

厩に続いて、土壁と門が見え、門外に3人の神人が走り、門内には多数の神人が建物の方を指して話している。この部分は全体に茶系の色に塗られている。

8-2: 疫病と範雅の家と夢—板屋根と板壁の賤家内部に、嘔吐する男と介護する女たちと痩せた犬がいる。脇の差し掛け小屋には女が横たわり、屋根には赤鬼が家を除きこんでいる。家の前に御幣と焚かれたあとの火や縄の結界があり、祈祷師らしき老人が童に肩を借りながら歩いている。その家の横には黒犬が口から何かを放つ。隣家の門前と土壁の囲まれたところに、大勢の騎馬の

侍と兵が集まり、先頭の鎧を着た武者が馬から下りて跪いて手を合わせている。その左の兵の内部には、正面から捉えられたひと間で、僧範雅が戸棚から『唯識論』の本を出して、入道に示す。

10-3: 頼通三拝の夢—東帯姿の公卿や弓矢を持った侍たちを引き連れた頼通が、地面に額ずいている。その前方には、左下斜め下がりに興福寺西室房の入口が配される。室内では、灯火の下で僧永超が熱心に読み事をする。霞がその僧の周りを取囲んでいる。

11-4: 地蔵菩薩帰還の夢—右側の画面上部に正面向きの興福寺幣殿で、般若心経等の講義が高座の上で高僧によって行われている。拝聴する僧も控える。画面下部は庭。右下斜め下がりに檜皮屋根が区切る。霞に包まれた左に朱塗りの鳥居が見え、瑞雲に乗った地蔵菩薩を先頭に神人たちが大勢続く。画面下部には雑木林の松や杉の先端が並ぶ。

19-3: 康景の夢—春日神人の一人が、向こうの山の峰の上の丸い光の輪を指差し、他の2人がその方向を見る。かれらの前方には、細い溪流が勢よく流れ、そこに板橋が掛かっている。足元には、高木が並んでいる。彼らの頭上には霞がかかり、その上に山々が連なるのが見える。山並みが終わった左にある切り立つ山際の横を、大勢の神人たちが手に手に御幣を持って並んで下ってくる。

(5)-② 1-3、12-5、16-2III

1-3: 吉兼の夢—普請をする場面。地割と礎石置きし、丸太から板を切り出し、表面を削り、木組みした木材が積んである。多くの工人たちが働き、中には子供たちも運んでいる。奥では食事をしている。作業現場が大きな山で区切られ竹林が現れる。竹のうえに襲装束の貴女が浮かんでいる。左側の家は扉が一間分取り除かれての内部が覗かれる。奥では主人夫婦がぐっすり眠っている。襖の手前に侍女が、外の簀子縁には弓矢を立てかけて侍が、縁の下には黒い犬が眠っている。家は霞に囲まれている。

12-5: 恩覚の夢—右端に八幡宮宝殿と階と斎垣があり、宝殿中に東帯の端と縹縹縁畳の上に袴の端が覗く。画面中央の宝殿前には僧恩覚が居眠りする。画面下部には従者である三人の東帯人物が並ぶ。右下斜め下がりの檜皮葺屋根が区切る社殿の外には、振り返りながら恩覚が一人歩き去ろうとしている姿があるだけで、ほかに何も無い。上部に霞が少し掛かっている。

15-3: 斎宮の夢—画面いっぱい斎宮の邸の寝所部分が描

かれる。すべての格子蔀妻戸が閉じられている。天井から覗く室内の庇の間には、女官たちが几帳の外に控える。障子張が開かれ、御簾も奥に押しやられて、奥の間に眠る齋宮の様子が見える。その頭の前に長い裾を引く束帯姿の人物が後姿に立っている。

15-5: 紀伊寺主の夢—格子も舞良戸もすべて閉じられた中で紀伊寺主夫婦と侍女が眠り、外の縁に弓矢を壁に立て掛けて鎧を枕に侍が眠っている。それに続く納戸の扉や壁が開いていて、たくさんの米俵が見える。一人の僧がそこから米俵を外に押し出し、その俵を長い棒で突いて壊し、中の米を撒き散らしている。大きな納戸らしくまだ左に続くらしいが途中で途切れる。そこに高い木と木の俣に鳥がいる。納戸を取り巻くように霞が覆っている。次に法泉房の住房の戸を叩く男が、米俵と野菜を天秤棒に繋いだものを足元に置く。瓦屋根の奥に、格子を一部上げて、まだ灯火がついている夜の光景の中に、膳のうえに白いご飯が盛ってあり、皆で食事をしているようである。

16-2II: 真恵房と貞慶の夢—画面右端に春日社若宮殿が描かれる。その春日社の参道に解脱上人貞慶他の僧達が平伏する。長い参道が南の楼門に続き、楼脇に同朋の僧真恵房が、柵を菰に包んで待っている。霧に包まれた画面の左に、険しい笠置山の登る一行が描かれる。その左側の山の中腹に立派な角の二頭鹿が祠の後ろの上方にいる。山裾の庵に、真恵房と貞慶が眠る。そこに春日社の御供預親弘が尋ねている。庵は戸口が取り払われ、襖が開けられて中が見える。上方に霞が掛かる。

以上のように夢場面のある段は、情景として絵画に表現している。

#### 4. 夢場面情景の人物表現の特性

前章に記述した段の夢場面の情景の画面にはどんな人物モチーフが取り上げられているかを検討する。(挿図参照) まずは、絵巻の巻数と段の順に夢場面の情景にかぎって登場している人物名を挙げる。

- 1-2: 貴女と光弘
- 1-3: 貴女と吉兼夫婦・侍女・侍
- 4-1: 真言僧・忠実・天狗僧3人・神主時盛
- 4-6: 僧と実定
- 5-4: 3歳の童子と神人

- 6-2: 門外に3人の神人と邸内の多数の神人
- 7-3: 束帯人物・直衣指貫袴人物と範頭
- 7-5: 五条局
- 8-2: 大勢の騎馬武者と兵
- 8-7: 束帯人物と興福寺旧住僧
- 10-2: 束帯人物と林懐
- 10-3: 頼通と従者・隨身
- 10-7I: 貴女と教懐(小鳥と鹿)  
II: 来迎聖衆・教懐と惟範と水汲み僧
- 11-1I: 恵暁と閻魔王と閻魔王宮冥官・罪人たち  
II: 束帯人物と恵暁
- 11-4: 地藏菩薩と童子・大勢の神人
- 12-1: 束帯人物と従者・白衣僧と蔵俊
- 12-3: 地藏菩薩と牛飼童・多数の神人と(鹿)
- 12-5: 束帯人物と薄茶色袍に袴の人物と3人の従者と恩覚
- 13-4: 盛恩と少年
- 14-1: 火のそばの僧と腕
- 14-2: 襲装束貴女
- 14-5: 稚児と頓覚房
- 15-3: 束帯人物と齋宮・3人の女官
- 15-4I: 実尊と稚児・従僧と大鹿  
II: 尊遍と大鹿
- 15-5: 僧
- 16-2I: 大鹿2頭  
II: 春日社御供預親弘と
- 19-3: 夢の情景に人物はいない。(しかし、現実場面に夢を見た神人康景と(彼が話した神人2人)がいる)

このように、夢場面の情景を描いた画面には、詞書に記載された夢の場面に登場する人物が、そのままモチーフとして登場する。つまり、詞書に記載された人物数と夢情景の画面に描かれた人物モチーフ数は、ほとんどが一致する。

しかし、以下の段には、詞書に記載された人物数に対して画面に描かれた人物モチーフ数が増えている。その増え方を次のように少し区分して考える。

a) 詞書に記載された人物がその従者を連れた情景になって画面に登場している。

- 11-4: 地藏菩薩と童子・大勢の神人: 詞書には「春日三宮」「御形は地藏菩薩」とある。
- 12-1: 束帯人物と従者・白衣僧と蔵俊: 詞書には「神輿にて入らせ」「一宮は顕に」「余三所は御輿の内」とある。

この2段とも、詞書には従者の記載はない。

11-4は地蔵菩薩が帰還の場面ということで、雲に乗っている情景を描いているところから、来迎図と同じ構成を創り上げたと考えられる。また、12-3に地蔵菩薩と牛飼童・多数の神人(鹿)という組み合わせで詞書場面が作られていて、地蔵と神人の組み合わせがあることから、絵の作者が同じ条件にして描いたものとも思われる。

12-1は四神ともが御輿によって運ばれていることから、輿を運ぶ人物が必要となり、白衣僧を描き込んだ。輿に載せて神体を運ぶときの決まりがあって、従者をここに書き込んだものと考えられる。が、現在のところ詳しくはわからない。

b) 11-1Iでは、夢場面の情景の画面内に、恵暁と閻魔王のほか、閻魔王宮冥官と罪人たちが登場する。詞書に「閻魔王宮より請うぜられて」とあるように、閻魔王宮に要請されて出かけたと言う恵暁は、夢の中で、『法華経』を読むという行為をしている。夢の中で、受身に託宣を受けるのではなく、自らが動く主体となっている。しかも、「閻魔王」からではなく「閻魔王宮」からの要請と記載されていることから、閻魔王宮の様子が必要と考えて、作画されたものであろう。そこで、詞書に具体的な人物名はないが、閻魔王宮に存在すると考えられた人物モチーフたちが画面に描きこまれていると考えられる。

c) 10-7IとIIは、詞書に記載されていない小鳥や鹿や水汲み僧が画面の情景に描きこまれている。

10-7Iには貴女と教懐のほか小鳥たちと鹿たちが描かれる。詞書には、「貴女おはしまして」「空を飛び去り」とあるだけで、小鳥や鹿の記述はない。小鳥や鹿は人物ではないので、人物数とはいえないかもしれないが、記載のないモチーフではある。この場面は、後に教懐が浄土に往生したことが言われることから、往生を直接は描いていないが、間接的に暗示するものである。そこで、他の往生の夢を見してみる。5-4:俊盛の往生の夢に満開の桜が夢の中の情景にモチーフとして登場していた。その桜と同じように教懐が浄土に往生したことを祝する意図が表現されているといえよう。鹿については、「四御殿は…貴女の形を現し」と詞書の記載にあるように貴女が春日第四神を表すのと同じように、春日明神の象徴の意味を込めたものであろう。

さて、10-7IIでは、教懐を交えた来迎聖衆が惟範を迎えにくる夢である。それを崖の下で見上げる水汲み僧のモチーフが描かれている。詞書には、「教懐上人聖衆の先より」「歌舞したまう」と教懐上人と聖衆の記載だけである。また、詞書には「惟範阿闍梨入滅の夜もある人の夢に」と記載があり、この水汲み僧のモチーフは夢想した人物を描いたものかもしれない。

「ある人の夢に」とある詞書の記載にたいして、絵画にその人物を特定して描くことなかったが、この段でそれをしたものかもしれ

ない。ここでは、その夢想の主体を特定して描いた可能性を指摘するにとどめたい。

以上の段の夢場面では、詞書に記載のないモチーフが絵画の夢の情景にあるということを確認した。しかし、これ以外の段では詞書に記載のある人物だけが夢場面の情景の動くモチーフとなっているといえることができる。

これに対して、現実光景を描く画面では、詞書に記載のない人物モチーフが多数登場している。例えば、6-2の親宗邸の様子では、病気の親宗だけではなく家族や家人たちが様々に描写されている。

このように人物モチーフの数の限定が、夢場面の情景を表現することに際して大きな条件となっていたといえる。絵の作者高階隆兼は、夢の中という限られた意識の制限に登場人物の数という枠を持ち込んでいると考えられる。

夢の情景には、現実の光景と人物モチーフ数において識別された表現がみられるといえよう。

## 5. 夢場面の情景と現実光景の表現

前章で、夢場面の絵画化には、現実場面の絵画化と異なる条件を持っていることがわかった。そこで、この章では、人物モチーフ数の限定以外にどのような表現の工夫があるのかを検討する。

そこで現実の光景と夢の情景とを連続させる段に注目してみた。その各段での現実と夢の表現を検討する。ここでは、再び、2章の分類に従ってすすめる。そこで、分類(3)と(5)の各画面の現実と夢とを記す。

(3) 4-1、7-5、11-1(複数の夢)、14-1

4-1 忠実の夢—妻戸と御簾で区分

夢—一庇に畳がない(上畳みを敷く)など物が少ない。限定された色彩。室内開放開け放ち(長押し小壁まで取り除く)。

現実—畳・女房の夜具・襖絵・几帳・掛け布など物が多い。長押し小壁の白が見られるなど明るい色彩

7-5 五条の夢—地面で繋がる

夢—暗い色彩の周囲。河の岸に卒都婆のみ。草木など植物もない。

現実—外は夜、室内は明るい昼間のように豊かな色彩で、女性の部屋らしい多数の装飾品もあり華やきがみられる。

11-1I-II(複数の夢) 慧暁の夢—区分は霞と雲

現実—色彩トーンを落とし描く、明度の高い色を使わない。慧暁の夜具・水差し・掃除用箒・格子用竿などの物

夢I—閻魔王庁の赤と緑の華やかな建物に、冥官の衣服も赤・

緑・青・橙と多色。経巻と机など最小限の物

夢Ⅱ—霞に囲まれる僧坊、屋根の茶系の色合いに貴人の黒服と畳の緑

14-1、手が出てくる夢—襖で区分

夢—舞良戸天井すべて取り払う。板敷きに棚、籠など最小限の物。正面視。

現実—戸や襖が閉まる。眠る人の夜具、壁には掛衣桁、板戸に張り紙など多くの物。俯瞰視。

(5)① 6-2、8-2、10-3、11-4、19-3

6-2： 親宗邸の様子と夢—廐の屋根で区分

現実—高い視点から見下ろす門と塀。明快で多色。

夢—低い視点で正面向き門と塀 単純な薄茶色の門と塀と人物の衣

8-2： 疫病の様子と範雅の家—塀で区分

夢—低い視点、正面に捉えた人馬明快な色彩

現実—疫病の家・入道家とも高い視点、トーンを落とした色彩

10-3： 頼通三拝の夢—入り口の戸で区分

夢—頼通一団は高い視点で見下ろし画面下寄り部分に、明快な色彩を施し描く、

現実—正面向きの永超は霞に包まれたなかにスポットが当たった様に明快に彩色、画面上寄り部分に描く。

11-4： 地藏菩薩帰還の夢—屋根と霞

現実—興福寺幣殿 僧たちの顔を見せないやや上から見下ろす視線。明るい緑と赤い柱・檜皮の屋根明快な色彩

夢—より高い視点で見下ろす。鳥居の鮮やかな朱と地藏菩薩の明快な色彩以外は神人や樹木は鈍い色彩

19-3： 康景の夢—霞が上下を分けて上が夢場面の情景、下が現実場面の光景

夢—霞の上部に重なる山の峰の上部に大きく虹のような円弧に光の縁を描く

現実—霞の下の部分に神人三人(うち一人が指差す)描く。うしろに侍達。夢の場面の後に再び霞の下に人物達

(5)② 1-3、12-5、15-3、15-5、16-2I II

1-3： 吉兼の夢—山による区分

夢—竹林上貴女と吉兼—夜具刀侍女侍犬の最小限の状況物上方から見下ろす。霞に包まれる。やや暗いトーン。

現実—普請場面—道具・材料など多くのもの 大きく正面視で。霞なし。明快な色彩。

12-5： 恩覚の夢—屋根による区分

夢—宝殿正面扉開く赤緑白黄色彩豊か。近づいた視点。

現実—遠い視点から中央部に小さく恩覚。多層の八幡社殿。色彩が限られる。

15-3： 斎宮の夢—霞で区分

夢—遠く高い視点、明快な色彩

現実—近く、低い視点、建物は茶系色に墨線。たたみ、御衣のみ明快で強い色彩

15-5： 紀伊寺主夢—壁と霞で区分

現実—白い壁、赤茶色の夜着、はっきり見える顔。壁の張り紙など細かに描かれた部屋の様。高視点。

夢—くすんだ緑や赤や茶色の米俵。樹木の葉と吊るし柿の黒、霞に囲まれた情景。低い視点正面視

現実—明快な朱扉と瓦屋根、格子の黒、人々の衣服の文様。高視点。

16-2I II： 真恵房と貞慶の夢—山の端による区分

現実—春日社で礼拝と笠置山に登る貞慶たち：急傾斜の山端に半分隠れた姿を遠い視点で

夢—鹿：緩やかな山腹に人間より大きく近い視点で。色は黒々と横向きと正面向き、斎垣前に大きく祠

親弘： 鹿のいる山塊の麓奥の庵の縁に中を覗く。真恵房と貞慶：小さく最小限の物の中で

以上みたように、現実の光景と夢の情景が連続する画面では、建物や山、霞などで夢と現実の場面が区分されている。それ以外にも以下の3つの方法で、表現そのものが識別されている。

一つ目は夢の情景は物モチーフが少ないか、省略されていることである。例えば、屋内の夢では、壁や戸障子が完全に外されてしまっていることがある。戸外の夢では、場所を特定するための植物以外にないことがある。

二つ目は、色彩の調子が異なることである。一方が類似した色使いやくすんだ鈍い色彩を使うのに対し、他方は多彩な色使いや明快な明るい色彩を使って、画面上で感じを変化させるのである。この色使いは、現実と夢のどちらかと決まったものではないが、両者が並ぶ時に識別のために変えてある。

三つ目は視点が異なることである。一方が近づいた視点なら他方は遠く離れた視点を、また、低い視点か高い視点を意識して使い分けている。これも同じくどちらかとはさまらない。

このように、現実と夢は微妙に絡み合っているようではあるが、かなりはっきりと識別されて表現されているといえる。

## まとめ

以上の検討から、夢場面の情景は、現実光景と意識的に描き分けられていた。

何か寂しい感じのする夢の情景は、まず登場人物が、最小限

に抑えられていた。つぎに、屋根・天井・建具類を取り除き、時には、長押うえの小壁まで省略されていた。建築物は枠だけで、その意味を象徴的にしか示していない。室内には家具の類がない。必要なものだけが描かれている。戸外でも、開け広げの空間にその場を特定できる必要最小限のものが描き込まれているだけである。

ここに、絵画作者隆兼の夢を見ることに対する考え方がみられる。まずは、夢には限られた人しか登場しないことである。次に人物の行動が、よくみえることだ。家の中であろうと、外であろうと、はっきりみえることである。人物の行動に意識が集中しているからである。また、夢の中では、建物や障害物は苦もなく通り抜けられることを体験していたのであろう。だから、家という建物の枠だけが描かれたのであろう。しかし、見えるものは限定される。だから、最小限のものだけがモチーフとなって描き込まれたのである。

色彩の問題は、夢の内容や種類と関わるのであろう。嬉しい夢、よい夢は、明快に色付けされる。しかし、恐ろしい夢や、何とか助かった夢、明神の怒りに触れた夢は色調が鈍い。今でこそ、夢の情景は意識によるものであると考えられている。しかし当時は、やはり神の見せるものと考えられていたのかもしれない。

また、視点の変化は、連続画面における場面転換の絵巻の常套手段である。しかしそれだけではなく、登場人物に対する思い入れや神の加護のありようによる変化も考えるべきではあろう。

夢の情景の絵画化に関しては、検討すべき事項があるが、今後の課題としたい。

---

註1 宮次男「春日権現験記絵巻」75頁 『日本の美術』203  
至文堂 昭和58年

註2 小松茂美編「春日権現験記絵巻」上下 詞書 続日本の  
絵巻13・14 中央公論社 1991年

註3 山本陽子「春日権現験記絵に見る神の顔を描くこととはば  
かる表現」について『美術史』140 1996年

註4 加藤悦子[「春日権現験記絵」にみられる夢の造形につい  
て]『美術史家大いに笑う』ブリュッケ 河野元昭先生退  
官記念論文集編集委員会編 2006年  
夢を見る主体の問題で分類するものである。

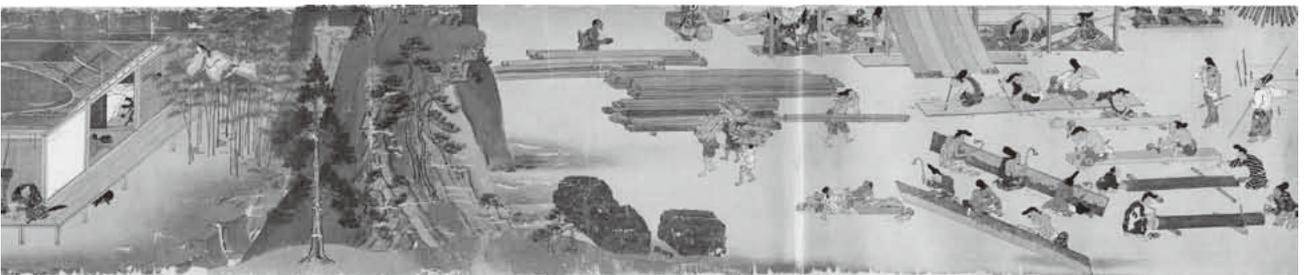
#### 挿回註

「春日権現験記絵巻」の図版は、すべて『続日本絵巻大成』の図版より複写したものである。

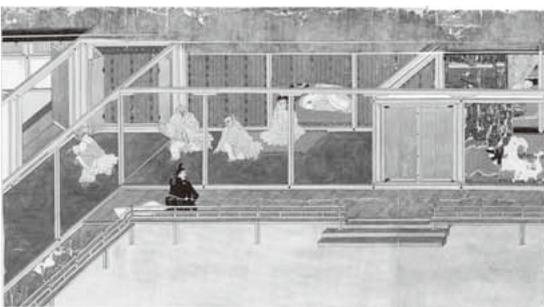
参照挿図



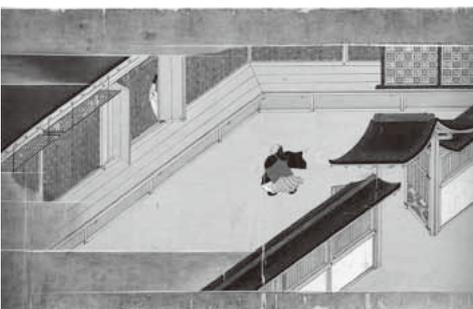
1-2



1-3



4-1



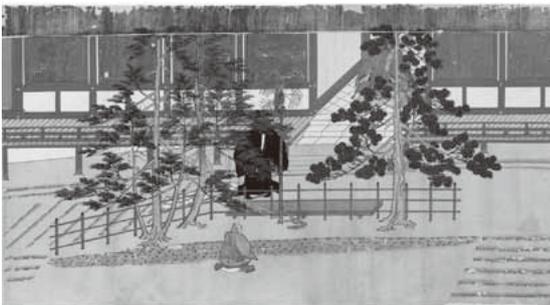
4-6



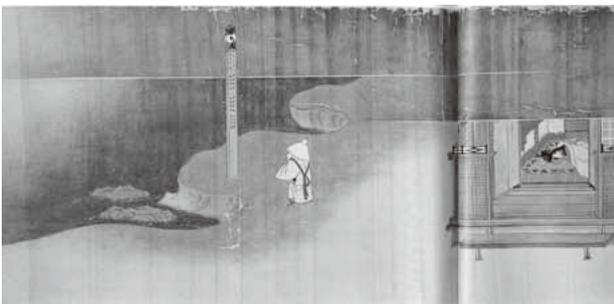
5-4



6-2



7-3



7-5



8-2



8-7



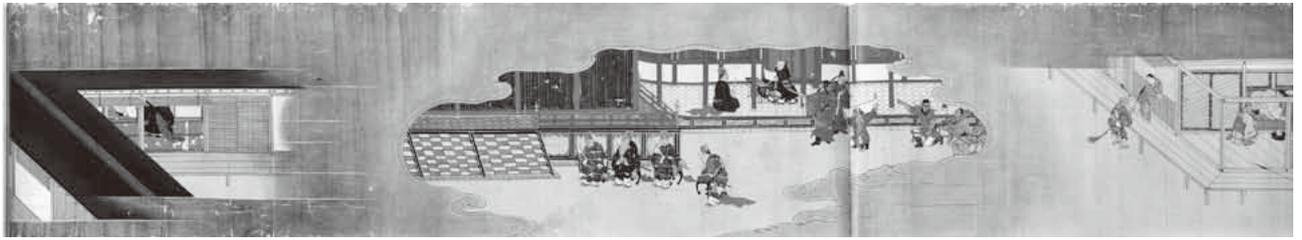
10-2



10-3



10-7



11-1



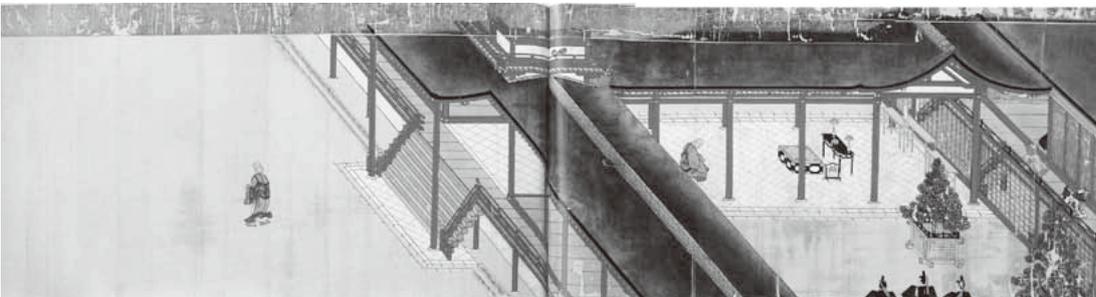
11-4



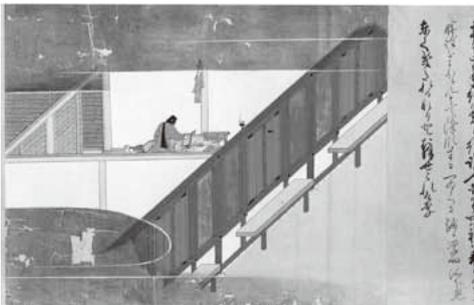
12-1



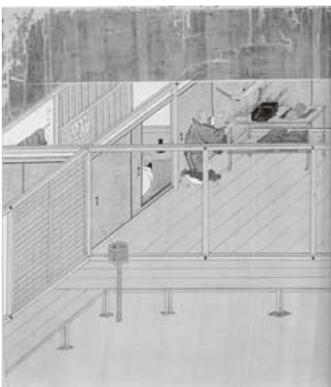
12-3



12-5



13-4



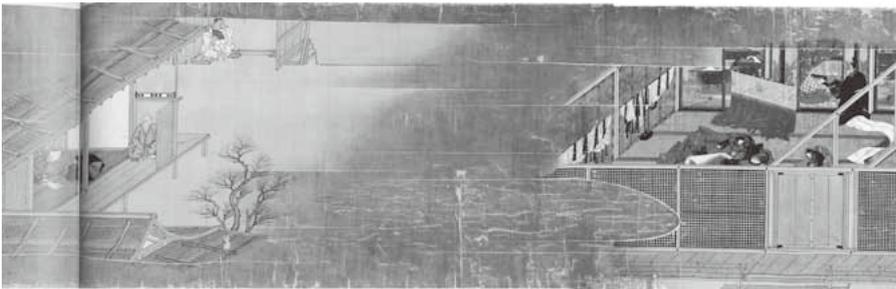
14-1



14-2



14-5



15-3



15-4



15-5



16-2



19-3